

## 奨学金を借金と知らないで 借りている人もいるの？

金融調査部 研究員 是枝 俊悟

-今回の数字-

**43.9%**

(何の数字であるかは、後ほど紹介します)

近年、大学生を抱える親の世帯所得が減少する一方、大学の学費は上昇が続いています。その結果、親の所得では学費を賄い切れず、学生が奨学金を借りることが大学進学に不可欠になりつつあります。

しかし、日本における奨学金のほとんどは給付ではなく返済の必要な貸与のものです。返済の負担は決して軽くなく、日本学生支援機構の奨学金の3ヵ月以上の延滞債権は18万7,374件に及びます<sup>1</sup>。

延滞者のうち、常勤社（職）員として働いている者が36.2%しかいないなど、延滞の背景には若者を取りまく雇用情勢の厳しさがうかがえます。しかし、奨学金を借りる際の本人の意識が不十分なことも延滞の理由に挙げられます。

奨学金の返還義務について「いつ知ったか」という問いに対して、「貸与手続きを行う前」と答えた者は、無延滞者では92.5%でしたが、延滞者は56.1%しかありませんでした。このことは、裏を返せば、延滞者のうち43.9%は借金と知らずに貸与手続きをしていたということを意味しています。

奨学金は住宅ローンに次いで、「人生で2番目に大きい借金」とも言えます。住宅ローンを借りる際は、ほとんどの人はどの住宅を購入するか、家賃を払い続けることとの損得やローンを払い続けることが可能か…と、リスクとリターンに鑑み真剣に検討し、意思決定するものでしょう。

奨学金を借りる際にも、どの大学に行くべきかや、高卒で働く場合との損得や返済を続けられるかなどを検討すべきでしょう。

<sup>1</sup> (独) 日本学生支援機構「平成25年度奨学金の延滞者に関する属性調査結果」より、以下同じ。

これらを考慮した上で奨学金を借りると、奨学金を借金だと意識しないで漫然と借りてしまうのでは、受験する大学の選択や大学入試に臨む際の本気度、また大学生生活の過ごし方も大きく変わってくるものと思います。

残念ながら、今の学校教育では、大学進学に「投資」することのリスク・リターンを検討できるほどの金融教育は行われておらず、十分な理解もなく奨学金を借りる学生がいるのも無理もないことです。

「人生で2番目に大きい借金」を主体的に判断し、有効活用できるようにするために、中学校や高校でもっと金融教育を行うべきと思います。

もちろん、親の所得や資産により子の大学進学の可否が左右されるのはよいことではありません。親の所得や資産が少なくても子が大学に進学しやすくなるよう給付型の奨学金を充実させるのも良い施策だと思います。ですが、予算をかけず現行の枠組みの中でやれることは、すぐにやるべきだと思います。

今回の数字—43.9%

奨学金の返済延滞者のうち「貸与手続きを行う前に返還義務を知った」と答えなかった者の割合

(出所) (独) 日本学生支援機構「平成25年度奨学金の延滞者に関する属性調査結果」

もう少し学びたい人へ

#### ◆米国での大学授業料の負担や奨学金制度はどうなっているの？

→岡野進「所得再分配を担う米国の大学授業料」(2015年3月12日)

[http://www.dir.co.jp/library/column/20150312\\_009538.html](http://www.dir.co.jp/library/column/20150312_009538.html)

→岡野進「膨張する米国学資ローン」(2015年8月13日)

[http://www.dir.co.jp/library/column/20150813\\_010010.html](http://www.dir.co.jp/library/column/20150813_010010.html)

※本稿は、「週刊ダイヤモンド」2014年8月2日号、24ページへの寄稿を再構成したものです。

(次回は10月2日に掲載します。10月9日まで、毎営業日連載します)

以上